

言葉の復興—東日本大震災に寄せて
中原中也記念館館長 中原 豊

◎特別寄稿

頑はない魂

—思想家としての中原中也—

吉岡 洋

◎特別インタビュー

中也とその周辺の人々

～花柳寛寿美さんにきく

◎常設テーマ展示

「『在りし日の歌』まで」

◎特別企画展示

「雑誌『四季』と中原中也」



◎新収蔵資料紹介

中原中也自筆署名入り「ランポオ詩集」

中原フク、長谷川泰子他

インタビュー音声収録カセットテープ

「中原中也全集」編集資料

◎企画展示ピックアップ

企画展I「宮嶋康彦—中原中也に訣別 白と黒の振幅の果てに」

企画展II「中也の母・フク」

◎記念館ニュース

「文学散歩～高原の自然と文学」バスツアー

浅田弘幸氏特別展示

「詩の朗読会～心も声も響かせよう」

主なできごと（平成23年度 行事記録）

第17回中原中也賞受賞作品

平成24年度 行事予定

中原中也記念館 館報2012

17

Public relations magazine
第17号

Chuya Nakahara Memorial Museum

言葉の復興―東日本大震災に寄せて

text=Yutaka NAKAHARA

中原 豊

「言葉を失う」という表現を頻繁に目にし耳にする時期がありました。東日本大震災の直後、被災地の様子が伝えられるたびに、遠く離れた山口に暮らす私たちもまた、自分たちの無力さを噛みしめながら、そう呟くしかありませんでした。

しかしながら「言葉」は少しずつ甦っていききました。被災地に生きる人たちの言葉、そこで救済や復興に尽くしている人たちの言葉、この未曾有の事態にどう立ち向かうかを真摯に考え続けている人たちの言葉。それらが、逆に私たちを励まし、ささやかな行動へと駆りたてました。

詩の言葉が果たした役割も小さくありません。金子みすゞの「こたまでしようか」は震災直後のささくれ立った心を慰撫してくれました。そして、ツイッターを通じて被災地から切実な声を発信し続けた和合亮一さんの「詩の磔」や、故郷の被災をきっかけに詩作を再開した須藤洋平さんの詩などは、被災地の現状を伝えるばかりでなく、亡くなられた人たちの永遠に失われた言葉に思いを馳せずにいられなくなるような、強い喚起力をもっていました。

こうした中で注目されたのが中原中也の「盲目の秋」です。故郷石巻の惨状に心を痛め中原中也賞贈呈式を欠席された辺見庸さんは、式に寄せられたメッセージの中で、大津波の映像に最もふさわしい言葉として「盲目の秋」を紹介されました。また、佐々木幹郎さんも昨年九月に山口で行われたトークや講演の中で、この詩を大きく取りあげられました。大震災とは直接関わりなく書かれた中也の詩が全く異なる状況の中で新たな生命をもつところに、詩の言葉の持つ力の奥深さがあります。その力を借りながら、失われた言葉自体が復興に向けて歩み始めているのを感じます。

中原中也記念館では、震災以降、募金活動を行い、被災地に所在する文学館を紹介する展示を続けています。改めて、亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災された方々に心からお見舞い申し上げるとともに、今後もしさやかな支援活動を続け、中也の詩の言葉を発信し続けたいと思います。

盲目の秋

I

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限の前に腕を振る。

その間、小さな紅の花が見えはするが、
それもやがては潰れてしまふ。

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて
酷薄な嘆息するのも幾たびであらう……

私の青春はもはや堅い血管となり、
その中を蔓珠沙華と夕陽とがゆきすぎる。

それはしづかで、きらびやかで、なみなみと湛え、
去りゆく女が最後にくれる笑ひのやうに、

巖かで、ゆたかで、それでゐて佻しく
異様で、温かで、きらめいて胸に残る……

あゝ、胸に残る……

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

頑是ない魂

—思想家としての 中原中也—

吉岡洋

text=Hiroshi YOSHIOKA

それを読むと、まるで幼年期と死期とが融合したような、奇妙な時間の明るみへと誘われる。それは、そこから人生のすべての瞬間を鮮明に見渡すことができるような場所である。そこに行くのはたぶん善いことのように思えるのだが、同時に何かしら、変になまあたにかい感触、どこかうしろめたいような感覚も伴っている——中原中也の詩にはじめて接した時の印象を、いま持っている言葉で表現せよといわれたら、こうとでも言えるだろうか。

昭和三六年、電力会社の技師をしていた私の父は、その年の九月に関西を襲った第二室戸台風後の復旧作業中、事故により殉職した。私は五歳であった。父方の親族とあまり折り合いのよくなかった母は、ほどなく職を得て嫁ぎ先を去り、妹と私を連れて京都市伏見区の下町に引っ越した。それは母方の祖父母が住む家のすぐ近所である。そういうわけで、毎日残業で帰宅の遅い母に代わって妹と私を育ててくれたのは、母方の祖母、そして当時電電公社(現NTT)を退職して間もない祖父であった。

祖父は大正期の文学青年で、勤め人となつてからも随筆を書いたり俳句を作つたりしていたアマチュアの文筆家だった。祖父の家の書架には、彼が青年時代から買い集めたかなりの量の文学書があった。小中学校を通じて学校に適応できない子供だった私はこの祖父の家に入りびたり、そこで読書の習慣と最初の文学的知識とを身につけた。「中原中也」と初めて出会ったのは、祖父の本棚に並んでいた『在りし日の歌』(創元社、昭和十三年)によつてである。

けれども祖父の家に通うようになってから何年もの間、私はその本を手にとることはなかった。ただ、本棚に並んでいるその背表紙の名前に「中」という字が二つもある著者名の、ぼんやりとした印象だけがあった。祖父は時々自分の好きな詩や文章を、孫の私に読み聞かせることもあったのだが、彼のお気に入りには島崎藤村、菊池寛、夏目漱石、芥川龍之介、白樺派の作家たち、そしてみづから私淑していた荻原井泉水などだった。祖父が中原中也を話題にしたという記憶はない。

だがついにある時(たぶん中学二年頃)、今の気なしに自分から、それまで手に取つたことのなかったこの詩集を開いてみた。最初に眼にとまったのは、「三歳の記憶」という作品であった【註】。

椽側(えんがわ)に陽があたつて、
樹脂(じゆし)が五彩に眠る時、
柿の木(かき)いつぼんある中庭(なは)は、
土は枇杷色(びわいろ) 蠅(は)が喰(く)く。

(【三歳の記憶】)

「五・七、四・四・五、四・四・五、七・五」という心地よい、きれいな韻律であり、抵抗なく読める。だがそこに詠われている世界は、詩情に溢れた回想でも、写実的な風景描写でもない。それでいて異様に鮮やかな、どこか此の世のものではないような光景である。三

歳の幼児が視ている世界とも、また死期を前に蘇った記憶のように感じられ、さらには、それら両者は結局のところ同じことではないか、とも思える。何というか、私はこの詩句に感動したというより、困ってしまったのである。これは一体何なのだ？と思つたのだ。それは、それまで祖父の話を通じて詩や文学について抱いていた私の理解の外にあるものだった。

この「当惑」が、中也の詩との最初の出会である。当惑と同時に、一度この世界を知ってしまったらもう元には戻れない、強い力で背後から頭蓋を掴まれてしまった、というような感覚もあった。それは一種病的な出来事のようにも、当時は感じられた。けれどもそれもまたひとつの成長、知識や能力が拡充したり、大人の世界に参入するといった変化とは別種の成長であつたことを、今は知っている。

人が最初に出会う社会である学校に馴染めなかつた子供にとつて、読書は避難所そのものだった。また、父という大人の男の模範を失い、周囲の少年たちと自然に交わることも難しく、すでに退職した(元々脱俗的志向のあつたらしい)祖父に纏わり付いていたのも、やはり避難だった。一五歳頃までの私の感情を支配していたのは、ひたすら人生から逃避したいという思いである。幼年期から人生の活動期を一足飛びして隠退することを空想していた。そのために周囲からも、あまり可愛げのない、幼稚でありながら妙に年寄りくさい子供と思われていたらしい。

中原中也の作品についても、こうした自分

自身の境遇から、随分勝手な読み方をしていたのだからと思ふ。とはいえ中也の詩はたしかに、思春期を越えて生き続けてゆくための助けを、私に与えてくれた。人は否応なく成長し、世間の中へと入ってゆかなければならない。そのことは仕方なく受け入れられるとしても、心の中にはいつまでも成長に抵抗し続ける何か、中也の詩の言葉を借りるならば「頑是ない」ものが在り続ける。私にとつての救いは、そうしたものに言葉を与えることができる、与えてもよいということを教えられたことだった。

思ふけれどもそれもそれ

十二の冬のあの夕べ

港の空に鳴り響いた

汽笛の湯気や今いつこ

(頑是ない歌)

つまりはこの「汽笛の湯気」なのであり、それさえあれば大丈夫だと感じたのだ。汽笛の湯気そのものは消えても、それに名付けることが許されているのなら、何とか生きてゆけると私は思つたのである。この確信は、私が獲得した最初の「思想」と言つてもよいようなものであつた。

高校に進学した頃から数年間、私は中原中也を読まなくなつた。というより、文学書をおおむね遠ざけていた。学校に対する不適応な状態は相変わらず続いていたが、避難所は

普通の文学よりもサイエンス・フィクションに、そして自然科学や数学、哲学へと移つていったように思ふ。純粋な数理や論理の世界の方が、より強烈に周囲の日常的世界から逃れさせてくれるように感じたからである。「頑是ない」ものの存在はその時期、それらの知識のもたらす高揚感の背後に一時隠れていたのかも知れない。私がふたたび中也を読むようになったのは、いろいろと迷つたあぐく文学部哲学科に進学して西洋近世哲学を学び始めた時であつた。

西洋の思想や文学を本格的に学び始める若者の多くが経験することだと思ふが、西洋のことを勉強することだと思ふが、西洋の近代思想・近代文学が何とも貧弱な、まがい物のように感じられてくる時期がある。私は美学を専攻してカントの『判断力批判』の研究で卒業論文を書いたのだが、その抽象度の高さと複雑さに魅了されつつも、それがあまりにも自分の日常的な思考や言葉からかけ離れていることを、どう扱つたらいいのか分からなかつた。知識は知識として習得し、論文を書くこともできる。だがそれはあくまで知識や技能にすぎない。もちろん専門的な研究とはそういうものだとか割り切らないと、研究者の世界には入つてゆけない。そのことは認めつつ、しかし心の中には「頑是ないもの」を感じて続けていたのである。

そうした時に中原中也の存在は、以前とは違つた意味で再び重要になつてきた。それは、ドイツ哲学の抽象性に疲れたので日本語の詩を読んで息抜きをした、というようなことではない。むしろ中也自身が、ある意味で私と

共通する問題——フランス詩のような西洋近代文学の圧倒的な伝統を前にして、自分自身の言葉をそこにどう位置づけるかという問題——に直面し、その状況にどう対処すべきかを知つていたのである。中也は京都でも東京でも富永太郎や小林秀雄といった、文学的知識においても語学能力においても太刀打ちできない年長の友人たちの中にありながら、ある絶対的な自信を持っていた。友人たちもまた彼には常に一目置いていた。

それは、たんに中也が詩的天才であつたといつた一言ですませられるような問題ではない(わたしの卒業論文は「カントの天才論」だったが「天才」というのは実に危険な言葉であり、芸術上の重要な問題を見えなくしてしまう)。中也はいわば、西洋近代詩の本格的な移入という状況と、一番真剣に向き合つていたので。たとえばアルチュール・ランボーの作品をできるだけ正確に日本語に移し紹介しただけでは、それは日本語の中では、ある特殊で難解な言語現象として現れる。中也はおそらく、ランボーの詩がフランス語においてもたらした革新を、日本語の中で実現するにはどうすればよいのかを考えたのである。「頑是ないもの」とはこの場合、外来の新たな知識をあくまで「自分」の問題として受けとらうとする態度として現れる。それはフランス詩ばかりではなく、明治以来の西洋化の過程そのものがはらむ問題であつた。

(前巻) 其の西歐二千年の文献の、そのあれやこれやが、誰かの口によつて少し唱へられさへ

すれば、人はその方へドヤドヤと寄り、それを一通り見た頃にはもう飽き飽きしてゐたのである。其処に、「自分」といふものは甚だ稀薄であり、一種の流行があつたばかりといふも強ら過言ではないのである。

(「よもぎの巻」)

「頑是ないもの」とはまた、「詩」に対する「うた」の抵抗であると言ひ表すこともできるかもしれない。日本語における「詩」とは、「poetry」等の概念とは異なり、たんなる文学の一ジャンルを指す中立的な語ではない。「詩」は近代以前においてすでに中国語の韻文を意味しており、日本語による「うた」とは区別されていた。近代以降は「詩」は西洋から来たものとされ、たとえ日本語で書かれる場合でも、その背後には西洋文学二千年の伝統が控えている。「詩」とはいわば、日本語という言語から自発的に流れ出る「うた」の力を抑えこみ、外来の規範に従うという条件の上に成立している。中也が行なつたのは、そうした「詩」の中心部に「うた」の生命力を環流させるという試みなのである。

そのように言うと、中也は西洋文学に、対して日本語の独自な力に訴へたと云つては、よく誤解されるかもしれない。もちろんそうではない。中也の中には単純な意味での西洋崇拜や、あるいはその反動としてのナショナリズムといった面は感じられないのである。むしろ彼は、西洋文学も日本文学も、共に人間の詩的営為として連続したものだということとを、直観的に理解していたように思える。そして、それは単純だが健全な思考だと私は

思う。私自身も西洋思想を学ぶ過程で日本語や日本人であることを強く意識させられたが、ひたすら西洋中心に考えたり逆に日本的なものに回帰したりする態度に対して、ともに抵抗感を持つていた。その意味で私は、詩人としてだけではない、思想家としての中也にも強く惹かれていたのである。

西洋と日本の連続性ということだけではなく、さらに彼はまた、知的エリートと普通の人あるいは大衆との関係も、連続的なものとして考えていたのではないだろうか。たとえば昭和九年に「文学界」に発表された「詩と其の伝統」という面白いテキストがある。その中で中也は、日本にはまだ詩が根付いていないと言つてはいるのだが、それは必ずしも文学研究者や文学愛好家のことだけを念頭に置いているとは思えないのだ。彼は詩が誰にとつても、たとえば「帽子」がそうであるように、「あいふもの」といった通念になることを望んでいるのである。

大衆の通念の中に位置しない限り、産出される詩の非凡と平凡とを問はず、詩の用途といふものはなく、あるとすれば何か他の物の代用としての用途をしかしてゐないと云へるのである。

(「詩と其の伝統」)

思想家としての中也といった言い方に抵抗を感じる人もあるかもしれないが、私は本当

の思想は書物の中にあると同時に、「大衆の通念」の中にもあり、「うた」として表現されるものでもあると考えているのである。詩の思想としての重要性は現在、国語の授業や受験勉強を通じて、詩を理解するとは「作者が言いたいこと」へ言い換えることだという偏見が広がつたために、見えなくなつていゝ。そういう勉強もやつて構わないが、それと並んで詩を声に出して読み、言葉の中に「うた」を聴きとるといふ訓練も、同じように重要なのである。思想とは理知だけで出来上がったものではない。「うた」とはいわば思想の「頑是ない魂」である。中原中也が思想家として投げかけた問いは、いまでも私たちの目の前に、少しも色あせることなく存在し続けているのである。

【註】この詩との出会いにまつわる話は、山口情報芸術センターにおいて市民グループと共に制作した「ヨロボシ」(星雲社、2008)におさめられた、中原中也記念館副館長(当時)中原豊氏との対談「文系男子—中也」においても話題になった。

頑是ない魂 —思想家としての 中原中也—

Special contribution 2012

text=Hiroshi YOSHIOKA

平成20年11月、星雲社刊。山口情報芸術センターのワークショップ「meets the artist」の一環として「一冊の本を作りあげる」というテーマのもとに集結した市民コラボレーターグループ「編脳研」と吉岡氏とが、企画から出版までを手がけた。大内人形職人の小笠原貞雄氏の対談、辛酸なめ子氏や菅啓次郎氏のエッセイなどが掲載されている。



吉岡 洋 Hiroshi YOSHIOKA

1956年京都生まれ。甲南大学教授、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授を経て、現在京都大学大学院文学研究科教授。専門は美学・芸術学、情報文化論。主な著書に、『情報と生命—脳・コンピュータ・宇宙』(新曜社、1993年)、『(思想)の現在形—複雑系・脳空間・アフォーダンス』(講談社、1997年)、訳書にH・フォスター編『反美学』(共訳、勁草書房、1987年)、マーク・ポスター『情報様式論』(共訳、岩波書店、1991年)、ブルース・マズリッシュ『第四の境界—人間機械(マン・マシン)進化論』(ジャストシステム、1996年)など。批評誌「ダイアテキスト」(京都芸術センター、2000-2003)編集長。「京都ビエンナーレ2003」「岐阜おおがきビエンナーレ2006」総合ディレクター。山口情報芸術センター(YCAM)長期ワークショッププログラム「meets the artist 2007」招待アーティスト。

中也とその周辺の 人々

—花柳寛寿美さんにきく—



中也没後75年を経た今、中也を直接知る人は
少なくなりました。その中で、花柳寛寿美さんは、
中也の結婚式で踊りを披露したという貴重な経
歴を持つ方です。現在も花柳流の師範として、現
役でご活躍の寛寿美さん。山口文化協会の理事
を發足以來務め、山口の芸術文化を長年見つめ
てきた女性でもあります。ご息女の美古都さん
にも同席いただき、寛寿美さんからお話を伺い
ました。聴き手 館長・中原豊、学芸担当・菅原真由美

踊りとのお会い

—最初に寛寿美さんの来歴についてお聞かせく
ださい。

大正10年11月7日に生まれました。実家は、
光田理髪店みつだといって、原田酒舗さんの前にあり
ました。父がどこへ行つて修業したんか知りま
せんけど、うちの父が顔を刺したら、普通は3

日のところ、1週間もつちゅうくらい…。そ
うするとやっぱりお弟子さんが地方から来る
んですよ。つねに3人は内弟子みたいのがおり
ました。今の松政（註：当時は湯田温泉株式会社）の
中にも支店を出していたんですよ。
光田理髪店は流行の先端を行っていました。ラ
ジオも先に買う。テレビも先に買う。だからみ
んなが集まるんです。ラジオ聴きに来たり、
テレビ見に来たり。

—ずっと山口にお住まいですか？

踊りを習いに東京へ行ったのは、ほとんど
山口です。家は変わったりしましたが。

小学校は湯田小学校でした。娘も孫もその子
どもも湯田小。4代ですね。そのあと、私は野
田学園のほうに行つたんですけどね。

小さい頃は、中原家のイブキの木（高田公園）の周りで鬼
ごっこしたり、井上公園も遊び場でしたね。



当時の中原医院周辺略地図

―踊りはいつ頃から始められたのですか。

小学校の時に九州から黒田先生という方が見えてたんです。その舞踊団に、私が何のために入ったかわかりませんが、お稽古にずっと行ってたんですよ。そこで新舞踊っていうダンスみたいなものやっとなし、日本舞踊式のものやっとなしね。

本式な日本舞踊を始めたのは、私が16歳の時です。その時に、東京から栗島すみ子さん(↓解説)っていう有名な女優さんが見えて、大和座っていうところで踊られたんですよ。それを見てね、ああ、やっぱり日本舞踊はいいなあと思って。それから、ちよつと相談したら、うちへいらつしやいってということで、東京の栗島さんのところに住み込みで行ってました。

(美古都さん)栗島すみ子さんは水木流の踊りの先生で、女優さんもされてました。長谷川一夫だとか、田中絹代だとかの俳優もお勉強に行ってたんですよ。栗島さんが母を見初めて、東京に連れて行きたいっていうのと、母が東京でお勉強したいっていうのが一緒になって。



東京で日本舞踊の修業をしていた17歳頃。

それからいろいろありまして、19歳の時に結婚にかかって、咯血がひどいので、山口に帰ってきました。

病気が治って、また東京行くって言ったたら、父が、東京は空気が悪いし絶対に行かせんって言ったんですよ。その頃、花柳寿寛先生のお母様が湯田の見番に踊りを教えにいらしていらしたのを見て、そこにお稽古に行き出したんです。東京で習ったのは水木流だったんですけど、寿寛先生のお母様は花柳流だったんですよ。それで今度は花柳流にね。

―踊りを教えられて何年になりますか？

花柳の名前いただいたのが、昭和18年ですから…。70年くらいかな？

―68年教えていらつしやることになりましたね。

(美古都さん)今も現役なんですよ。

その前に黒田先生に習って、水木流をやっているからねえ。ずいぶんやっていますね。踊りも変わって来ますよ、時代によって。



60歳、広島での舞台。



中也と孝子、結婚記念写真。西村屋にて。

中也の結婚式で踊る

―昭和8年、中也の結婚式で踊りを披露されたそうですね。それはおいくつの時でしたか？

小学校の5年生の時です。11、12歳くらいでしょうね。黒田先生に習ったってっていうの、近所の人も多少知つとつちやつて、踊ってあげてくれんか、ということだね。

西村屋さんの披露宴は、市長さんとか山口のお偉い方はつかりがいらしたようですよ。私たちが行ったのは、町内の十軒軒かが呼ばれた宴席で、中原のお宅でした。そこで踊ったんですよ。

―その時に中也とお会いになられているわけですが、何か覚えていらっしゃるありますか？

お座敷の一番上手にご夫婦がいらつしやる

んですよ。お客が両端に座っていて。その部屋の真ん中で踊ったわけですよ。踊りの振り付けの中に二度前へ進むところがあつて、私があるまりターツと中也さんの前まで行ったもんですから、近付きすぎて、中也さんがお膳をちよつと引かれたような、そういう記憶が残っていますけどね。びつくりしとつちやつたと思う。

―踊りの演目は覚えていらつしやいますか？

「唐人お吉」。その当時、流行歌ではやったんですよ。(↓解説を)

―では、蓄音器でレコードをかけて踊られたんですよ。

はい。「唐人お吉」っていったら、哀れな女をうたった歌詞ですよ。それを、わからんで

——花柳寛寿美さんにきく

もうちょっと年いっちょよつたら、日本舞踊を踊ったんでしょけどね。その時は、まだ正式な日本舞踊を習う前でしたから。今は本当に申し訳ないことしたと。それでもフク先生(註)・中也の母はね、「あんたが中也の結婚式に踊ってくれてよかった」って。その時のことを私が「ほんとに私知らんもんですから」って言うのと、フク先生は「いやいや、本当によかったよお」って、いつも仰いました。



野田学園時代(この数年前に中也の結婚式で踊った)

——結婚式でのエピソードの他に、中也について印象に残っていることはありますか？

他はね、ないんです。結婚式の時くらいで。その時の中也さんのお顔が着いというか、白っぽかったような、そんな印象は残ってますけど。でもあと、子供じやったからかもしらんけどね、中也さんのことは本当にね、あんまり憶えてないんですよ。私が、もうちょっと年がいっついたらね…。まだ小学校だから、話をしたこともない、観察もせんし。

奥さんの孝子さんはよく知っちゃうけど。孝

子さんは、中也さんが亡くなってこっちへ帰ってこられたんです。フク先生がいい方でね。うちの娘としてこれからずつとうちへ置くって。お嫁へ行くんでも、うちからお嫁さんとして出しますからって、しよつちゅう言つてらした。また孝子さんが賢い人でした。

フク、謙助の思い出

——フクさんからお茶を習っていらつしやいましたね。いつ頃からでしょうか？

そうですね、結婚して娘が生まれて、小学校あがる頃からかな。昭和30年頃からでしょうか。それからフク先生が90歳過ぎる頃まで。でも、私は不真面目な生徒でね。忙しいでしょう？子供もおるし、踊りのお稽古もするし。ええ生徒じゃなかった。

——お茶を習つきっかけは何だったのですか？

それがね、踊りで袂紗(たばし)さばきつていうのがあるんですよ、いろいろ。お点前を知らんといけんようになって、それでフク先生のとこ行きだしたんです。フク先生はお優しく、私、本当にかわいがられたんですよ。

そのときやっぱり中也さんのこと話してました。本当に肝(きま)やきで…っていう話を常にしちゃったけど。でも、火事に遭われて、その時に中也さんの本をだいぶ焼かれたらしいの。それからね、こんなに有名になるとは思わんし、あれの大事なものをみんな焼いてしまうたから申し訳ないって言つてね。それから中也さん

の愚痴言わない。ああ、よかったなって思つて。ご自分の結婚した時のことや、山口へ来たときの話やらも、されよつたね。お茶のお稽古やけど、お話が好きやつたね。



前列左から寛寿美さん、フク、思郎夫人・美枝子。中原家にて。

——中也の父で、医者をしていた謙助さんについては、憶えていらつしやることありますか？

私が1歳の時だから記憶にはないんですけど、赤痢にかかつて、中也さんのお父様に診てもらいました。先生がこりや日赤(日本赤十字病院)に行かんやいけんって言つて、黒い車を頼んでもらつて運ばれたんです。全部黒よ。昔はうつらんようになっていって。

中原先生のごことは、私、中也さんより詳しい。小さい頃、4、5歳ぐらいの頃でしょうね。家は中原邸の斜め向かいですから、よく家の前の腰

掛けに座つて、先生が人力車に乗つて往診に行かれるのを見てました。だから、中也さんよりもお父さんの面影のほうに印象に残ってます。中原先生つて、お小さい方でしたの。でね、人力車を引く車夫の「泉のおじさん」っていうのが、まあね、190センチぐらいある大きな方ですね。泉のおじさんが大きかったから、なお小さく感じたんじやろうけどね。あんまりものも言われんような方でした。

19歳で結核にかかつて東京から帰つて来たときも、中原医院に入院しました。

中也の兄弟たちと雑誌「詩園」

結核がだいぶ良くなつても、兄弟がたくさんおりましたから、家には帰れません。それで松田屋つて旅館の板長さんが、僕の家じやつたら、今2階が空いてるからつて言うんで、そこにしばらくおりました。まあその頃から、湯田に文学青年がいたんですね。新しい進歩的な人たちがそこへ集まつていました。山頭火さんとかも見えてましたよ。月に1回くらい雑誌が出るんですよ。山頭火さんとか、和田健(たけ)さんとか書いてちよつて…。

——「詩園」(↓解説)という雑誌ですね。山頭火さんとはお話をされたことはありますか？

いえ。そりやあるかもしらんけどね、父がやがましかつたですからね。それでもやつぱりね、みんなは楽しみに山頭火さんと話をなされたんでしょね。



東京から帰ってきた19歳頃。



雑誌「詩園」

「詩園」には中也の弟・呉郎さんと拾郎さんも参加されていますが、交流はありましたか？

はい。呉郎さんやらじゅつちゃん(拾郎さん)たちも皆「詩園」に書いて。

— 中也の兄弟たちとはお年が近いですが、小さい頃は遊ぶこともありましたか？

小さい頃はもう全然。やつぱりお医者さんの

家で、坊ちゃんですからね。遊んだ覚えがないんです。でも、呉郎さんも拾郎さんも、年頃になってからお友達になりましたね。思郎さん(註・中也の弟)もよく知ってるんですよ。中也さんだけ知らない。

ちょうど私が19歳の時、拾郎さんが、早稲田へ行きましてね。それから呉郎さんが長崎の医大のほうに行つて、帰ってきたら、私がいた板長さんとこの2階に集まるんですよ。その部屋に「夕月」つちゅう名前を付けてね。

(美古都さん)「夕月」は踊りからとったんじゃないですか？ 花柳流で難しい踊りがあつて、花柳流のお試験のひとつにもなってるんですよ。船頭の踊りで、手ぬぐい持つて踊るような小粋な踊りで。

「夕月」を私がそこで踊つたんですよ。それを見た呉郎さんが、ここを「夕月」つて名前にしようつて名付けたんです。そこにみんなが集まつて、食べたり、飲んだりしてたんですけどね。女性には私だけじゃないですよ。3、4人ぐらいね。中原さんのお宅にも集まりました。みんなでお酒をかわして。で、いい加減になると、フ

ク先生が出てきて、私やら女の子は先に帰つていいですかつて。そんな風に友達で遊んだりしてたんですよ。

拾郎さんはね、ハーモニカを吹くんですよ。私は踊りやるし、歌の上手な人は歌つて…。それで戦時中は慰問に行くこともありました。

— どちらに行かれたんですか？

慰問つていっても温泉、療養するところへ行ぐぐらいで。千人湯(註・湯田温泉株式会社)にあった大浴場)にもね、兵隊がだいぶおりましたよ。傷痍(しょうい)軍人。松政にはよく行つてました。あとは、九州にも行きましたね。



思い出を語る寛寿美さん

考えてみたら、中原家と私とは、多少つながりがあつたな…と思つてね。中原の中也さんのことは知りませんつて言うてたけど…。1歳の時には中也さんのお父さんに診てもらつて、呉郎さん、拾郎さんと遊んで、フク先生にお茶習つて…。皆いい方でしたよ。

ほんとねえ、ちよつと何か書いとつてもええね、私。いろいろなことが、やつぱり思い出されますね。

(平成23年12月22日、寛寿美さんのご自宅にて)

(解説1)

栗島すみ子
1902(明治35) - 1987(昭和62)

映画女優、日本舞踊家。東京生まれ。大正10年、松竹蒲田に入社(虞美人草(小谷ヘンリー)監督)でデビュー。楚々とした容姿で「躍人氣スター」となった。代表作に「船頭小唄」(大正12年/池田義信監督)、「麗人」(昭和5年/島津保次郎監督)、「淑女は何を忘れたか」(昭和12年/小津安二郎監督)など。昭和31年には「流れる」(成瀬巳喜男監督)に特別出演した。また、水木歌紅(のちに水木紅仙と改名)の名で、日本舞踊水木流の宗家として晩年まで活躍を続け、多くの門下生を輩出した。

(解説2)

唐人お吉

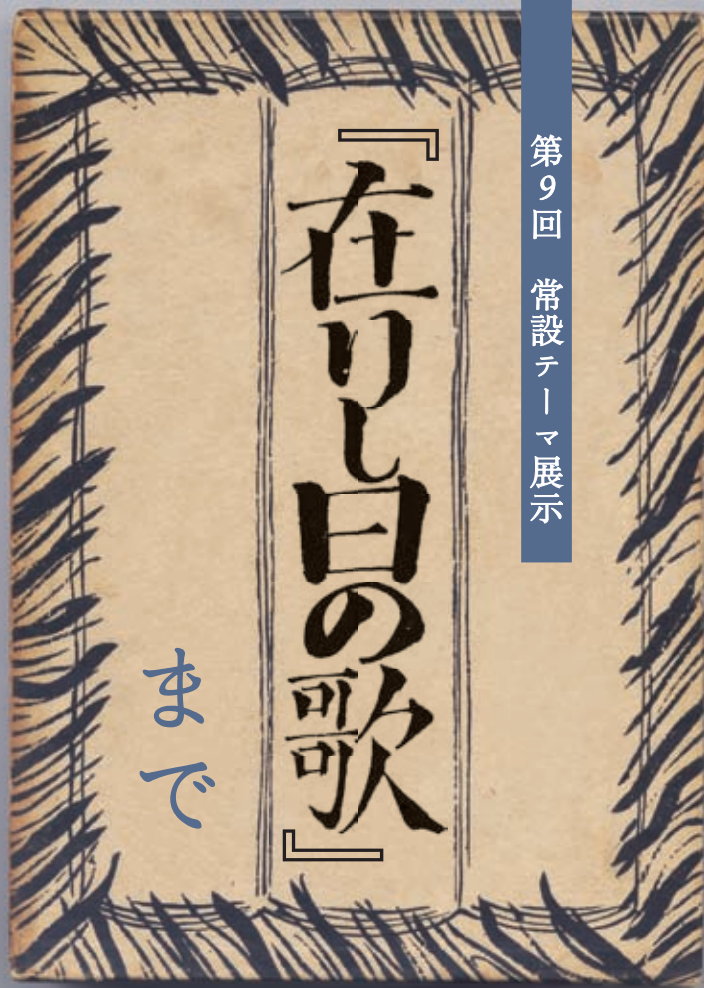
西条八十作詞・佐々紅華作曲・藤本三吉歌による「唐人お吉の唄・明烏篇」(昭和5年)。「唐人お吉」は、幕末の伊豆下田を舞台に、美貌を謳われた芸妓のお吉が、奉行所の命令により恋人との間を引き裂かれてアメリカ総領事ハリスに仕えるが、維新の動乱の中で不幸な末路をたどり、自ら命を絶つという史実に基づいた物語。十一谷義三郎の小説によって広く知られるようになり、昭和初期には映画や流行歌が多く制作された。

(解説3)

「詩園」

中原中也の没後1年を機に創刊された文芸同人誌。昭和13年9月から昭和17年3月にかけて26冊が刊行された。同人は中也に続こうとする和田健氏ら山口県内の詩の愛好者たちで、中也の弟・呉郎や拾郎も参加した。遺稿として残された中也の生前未発表作品を紹介した他、当時湯田温泉に風来居を構え、呉郎と親交のあった種田山頭火も句を寄せた。

第9回 常設テーマ展示



2012年2月15日(水)～2013年2月18日(月)

昭和12年9月、中也是第二詩集『在りし日の歌』の編集を終え、原稿を友人の小林秀雄に託しました。そして故郷・山口に帰ろうとしましたが、その翌月、結核性脳膜炎を発病し、詩集の刊行を待たずに息を引き取りました。半年後の昭和13年4月、遺された詩集の原稿をもとに、友人たちの手によって詩集は刊行されました。

詩集に収められた作品は58篇。その中には

「骨」「一つのメルヘン」「正午」などの有名な詩や、山口ゆかりの詩「冬の長門峡」が入っています。

本展では、「春」「六月の雨」「冬の長門峡」など、詩集収録詩の直筆原稿を通じて、その魅力を紹介しました。また、直筆原稿や日記など様々な資料により、刊行までのみちのりをたどりつつ、中也在「在りし日」という言葉にこめたい思いに焦点を絞り紹介しました。

1 詩集『在りし日の歌』

『在りし日の歌』は昭和13年4月に創元社から刊行されました。装幀を手掛けた青山二郎や中也から編集原稿を託された小林秀雄ら中也の友人たちの奔走により刊行に至ったこの詩集は、中也の作品を広く知らしめる上で、大きな役割を果たしました。

詩集の後記は、収録詩篇の発表時期、詩人として生きてきた半生、東京生活との訣別と帰郷への思いなどが語られ、『在りし日の歌』の自著解説といえる内容です。

このコーナーでは、詩集後記などにより、詩集『在りし日の歌』の概要について紹介しました。

2 第一章《在りし日の歌》

『在りし日の歌』には、58篇の詩篇が《在りし日の歌》と《永訣の秋》という2章に分かれて収録されています。そのうち第一章《在りし日の歌》は、「含羞」から「蜻蛉に寄す」までの42篇です。このパートは、主に昭和10年から11年10月までに発表された作品により構成されています。

このコーナーでは、《在りし日の歌》の中から、「春」「六月の雨」「冬の夜」など、直筆原稿が残っている作品を中心に7篇を紹介しました。



展示1



詩集『在りし日の歌』

3 刊行まで I

第一詩集『山羊の歌』発行から約1年後の昭和11年前半頃、中也是第二詩集の編集に取りかかります。当時は『山羊の歌』の反響も手伝い、詩壇で注目されるようになり、様々な雑誌から寄稿の依頼が届くようになっていきました。次々と新作を発表しながら編集作業を進らせていた矢先、長男・文也の死という大きな不幸が中也を襲いました。この出来事により、詩集はその意味を大きく変えていくこととなります。

このコーナーでは、詩集編集に使用された原稿などの資料により、詩集の編集過程について紹介しました。



展示3



展示4

4 第二章《永訣の秋》

第二章《永訣の秋》には昭和11年11月から12年10月までに発表された16篇が収録されています。章の題名は、11月（Ⅱ秋）に経験した文也との死別が色濃く反映していると思われまます。ただ、詩集後記に「東京十三年間の生活に別れて、郷里に引籠るのである」と述べられているとおり、詩集の編集を終えた後、中也是故郷・山口に帰るつもりでした。この章題の意味には、これまでの生活への別れの意味も含まれていると考えられます。

このコーナーでは、《永訣の秋》の中から、「一つのメルヘン」「冬の長門峡」「春日狂想」など、中也晩年の絶唱といふべき作品5篇を紹介しました。

5 刊行まで II

小林秀雄に詩集の原稿を託した中也是、その1ヶ月後、30歳でこの世を去ります。詩集は友人たちの手によって、中也の死から半年後の昭和13年4月に発行されました。初版600部、好評につき2ヵ月後には再版300部が刊行されました。『在りし日の歌』という題名は中也自身が決

めました。自らの死を予感していたかとは定かではありません。文也の死や自分の幼少期など、様々な意味が複合して込められているようです。

このコーナーでは、編集原稿の完成から中也の死、そして詩集の刊行と反響までを、詩集題の意味探究を含めて紹介しました。



展示5

在りし日の歌



展示風景

「四季」の特徴といえば抒情詩です。時代が軍国主義に傾く中、「四季」は抒情詩

雑誌「四季」は、春夏秋冬の年4回発行する季刊誌として昭和8年に始まりました（第一次）。創刊したのは堀辰雄です。堀は友人・知人に寄稿を呼びかけ、作品を集めました。堀の単独編集としての「四季」は、2冊出たところで終わってしまいました。昭和9年10月、編集同人として三好達治・丸山薫が加わり、月刊誌として復刊しました（第二次）。そして昭和19年6月まで続けました。戦後も何度か発行されましたが、本展で主に取り上げたのは戦前の「四季」です。

本展では、都留文科大学教授・阿毛久芳氏監修のもと、中也の直筆原稿・書簡をはじめ、堀・立原・津村といった「四季」同人たちの直筆資料や、「四季」第63号の原稿一式などの貴重な資料を一堂に会し、「四季」と中也の関わりを紹介しました。



展示1

特別企画展

「四季」と 雑誌 中原中也

2011年9月1日[木]—11月6日[日]

人たちのよりどころとなりました。ただ、一口に抒情詩といっても中身は多種多様です。萩原朔太郎や室生犀星といった有名詩人から、津村信夫や立原道造ら当時は無名だった詩人まで、あまたの詩人の作品が掲載されました。戦前の「四季」だけで、300名を超える人々の作品が載っています。

中也は、小林秀雄の紹介で第一次「四季」に詩を発表し、その後約4年間の25冊に、27篇の詩、5篇の訳詩、4篇の評論を発表しました。短期間にこれだけ多くの作品を発表したことからいえば、「四季」の主要な同人といつてよいでしょう。しかし、編集に直接携わることはなく、他の同人たちとの交流も比較的限られた範囲でしかなかったようです。そこには中也と「四季」の詩人たちとの微妙な距離感がうかがえます。

1 「四季」創刊

堀が「四季」を創刊するまでの経緯と、中也と「四季」が関わるきっかけについて、友人・小林秀雄が中也の詩を堀に紹介したことがわかる書簡などを展示しました。また、中也の詩「帰郷」について、「四季」に掲載された際、新たに加わった2行の背景について紹介しました。

《主な展示資料》

中也日記（千葉寺雑記）、堀辰雄宛小林秀雄書簡、堀宛献呈署名入り『山羊の歌』、「限定出版江川書房・四季社月報」、第一次「四季」創刊号、「スルヤ」第4輯

2 「四季」のアトモスフィア

―四季に集った人びと―

「四季」(第二次)の主要な同人である堀・三好・丸山・津村・立原について、中也との関わりを含めて紹介しました。なかでも、堀・津村・立原に関しては、関係各氏・各館のご協力により直筆資料を数多く展示しました。

また、1冊の雑誌に関わる人びとの思いについて、堀が編集した「四季」第63号(昭和17年2月)の原稿一式を通じて展示しました。

《主な展示資料》

津村信夫宛中也書簡、神保光太郎宛堀辰雄書簡、津村宛萩原朔太郎書簡、津村原稿(「春の噴煙」佐久の平で「林檎の木」)、立原原稿(BALLAD)「小さな墓石の上に」他多数、「四季」第63号掲載作品原稿一式、堀愛用の筆記用具、津村愛用の万年筆



「四季」第17号表紙



展示2



3 「四季」と中也

―孤高な嘆き―

中也の日記などを通じて、中也の「四季」および「四季」同人たちに対する印象について紹介しました。その一方で、同人たちが中也の死後書いた追悼詩や中也論などを通じて、同人たちの視点から観た中也の姿を紹介しました。

また、中也が「四季」で発表した作品のうち数篇を、監修者の阿毛氏による解説付きで展示しました。

《主な展示資料》

中也詩原稿「初夏の夜に、おもへらく」、中也翻訳詩原稿(ランボー「鳥」「オフェリア」、デボルドール「ヴァルモール」「サアディの薔薇」「娘と山鳩」「鐘と涙」「矜持よ、怒せ!」、中也日記(建設社版自由日記)、「在りし日の歌」、中也訳「ランボオ詩抄」「ランボオ詩集」、神保光太郎自筆編集の中也詩集、「四季」第32号(中也追悼号)



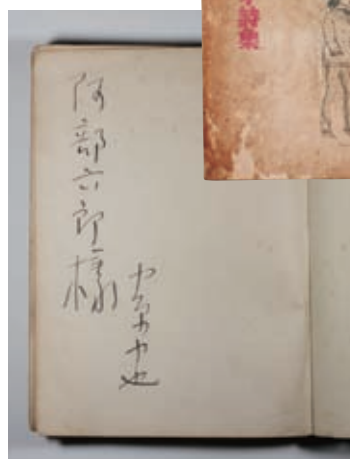
展示3



中原中也自筆署名入り

『ランボオ詩集』

昭和12年9月15日／野田書房



平成23年4月1日、中原中也の友人であったドイツ文学者・阿部六郎のご遺族・小野悠紀子氏から、中也の自筆献呈署名入り『ランボオ詩集』をご寄贈いただきました。見返しに万年筆で〈中原中也／阿部六郎様〉と書かれており、中也が阿部六郎に贈呈したものであることがわかります。

この本は中原中也の翻訳によるフランス象徴派の詩人アルチュール・ランボオの詩集で、収録詩篇は52篇、巻末に中也による「後記」が付されています。発売当初から売れ行きがよく、同年11月に再版、12月に3版が刊行されました。文語、口語、俗語を自在に駆使した独特の訳で、現在でも高い評価が与えられています。中也には、初版刊行時に印税の代わりとして50部が送られました。中也自身はその約半月後の10月5日に結核性脳膜炎に倒れ、22日に死去しています。

なお、当館が所蔵している中也自筆署名入り『ランボオ詩集』は、他に大江健三郎氏からご寄贈いただいたフランス文学者・渡辺一夫宛の1冊があります。この詩集の署名本は大変少なく、とても貴重です。

当館では、中原中也生誕祭の開催にあわせて4月29日から5月15日まで1階の特設コーナーにて特別展示を行いました。

中原フク、長谷川泰子他 インタビュー音声収録カセットテープ



平成23年10月、作家・評論家の村上護氏から村上氏が行ったインタビュー音源を録音したカセットテープ21本をご寄贈いただきました。

インタビューは昭和40年代末頃、中原フク、長谷川泰子、関口隆克らに対して行われたもので、村上氏はこれらの証言をまとめ、『私の上以降の雪は わが子中原中也を語る』（中原フク述、昭和48年、講談社）、『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛』（長谷川泰子述、昭和49年、同）を編みました。また、中也に関しては、『文壇資料四谷花園アパート』（昭和53年、同）、『中原中也の詩と生涯』（昭和54年、同）の著書があります。今回ご寄贈いただいたカセットテープは、

中也研究の大きな一助となった文献の基となる資料であるとともに、語り手の思いに満ちた肉声を後世に伝える大変貴重な資料です。「わたしの興味は中原中也が時代のなかで生きていくことの事実を、まざまざと知ることであつた。」（『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛 初版解説』と村上氏が記すように、語り手の人生と言葉の中には、中也の生きた証が確かに息づいています。

なお、収録音声の一部はデジタルデータ化を行い、企画展Ⅱ「中也の母・フク」において公開しました（展示の詳細については15〜16ページの企画展ピックアップをご覧ください）。当館では引き続き、全ての音声のデジタルデータ化および内容の分析を進めてまいります。



村上護氏にインタビューを受ける中原フク

『中原中也全集』編集資料

平成23年10月29日、詩人・文芸評論家中村

稔氏から、『中原中也全集』の編集資料40点をご寄贈いただきました。資料の内容は以下の通りです。

○書簡（計34点） 昭和26年〜昭和34年

中村稔宛書簡33通（大岡昇平筆19通、河上徹太郎筆1通、草野心平筆1通、佐古純一郎筆1通、神保光太郎筆1通、杉森久英筆1通、中原思郎筆3通、中原フク筆1通、中村研一筆1通、平井啓之筆2通、三好達治筆1通、安原喜弘筆1通）、野村孝子筆大岡昇平宛書簡1通

○原稿（計5点） 年代不詳

大岡昇平メモ2点、安原喜弘筆写中原中也詩篇2点（「疲れやつれた美しい顔」、「死別の日」）、安原喜弘筆写中原中也書簡1束

○『中原中也全集』編集用スクラップブック 1点（作成：中村稔）

中也の全集は、創元社版『中原中也全集』（全3巻、昭和26年）、角川書店版『中原中也全集』（全1巻、昭和35年）、角川書店版『中原中也全集』（全5巻十別巻、昭和42・46年）、角川書店版『新編 中原中也全集』（全5巻十別巻、平成12・16年）と計4度出版されていますが、中村氏は全ての全集の編集に携わっていらっしゃいます。

今回ご寄贈いただいた資料は、中也の関係者の貴重な直筆資料であるとともに、全集がどのように編集され、中也の関係者がどのように関わったのかを知る重要なものです。当館では、これらの資料について、更に詳しく調査を進めてまいります。

企画展ピックアップ
企画展Ⅰ

宮嶋康彦 —中原中也に訣別 白と黒の振幅の果てに

平成23年4月20日(水)～8月28日(日)

当館では数年に一度、文学以外のジャンルのアーティストが中也の詩の世界とのコラボレーションによって生みだした作品を展示する企画展を開催しています。今回は、写真家・宮嶋康彦氏による写真を中心とする作品を展示しました。

宮嶋氏は、風景、花、人、動物などの写真を撮るかわら、小説やエッセイの執筆活動を続け、写真と言葉が織りなす独自の世界を切り開いてきました。その一方で、たい焼の魚拓採集などの幅広い活動を展開しています。昭和26年長崎県佐世保市に生まれ、高校生の頃に中也の詩に出会い、その影響を強く受けました。当時は中也を真似てマント風のものを着て歩き、自分でも詩を書いてガリ版刷りの詩集を発行していたそうです。同時期に部活動を通じて出会った写真を生涯の仕事とするようになりませんが、その後の多彩な表現活動の原点に中也があるといえます。

展示では、会期を前期(4月20日～6月5日)と後期(6月7日～8月28日)に分け、それぞれ20点、計40点の写真と、オブジェ風の作品や著書を紹介しました。

中心となる写真はいずれも和紙を用いたプラチナプリントによるものです。プラチナプ



展示風景

リントは約130年前にフランスで開発された技法で、宮嶋氏は雁皮(がんび)や楮(こうぞ)による和紙(山口市徳地産のものを含む)を用い、印画紙の制作から日光による焼付まで、すべてを手作業で仕上げています。和紙を用いた点は日本で最初の試みであり、画面の緻密さに加え、紙の質感やプラチナ溶液を塗った刷毛の跡などが相まって、独特の雰囲気を出していました。

写真は、東京、鎌倉、山口など中也ゆかりの地で撮影されたものが中心になっています。宮嶋氏によれば、一点一点は特に中也や中也の詩を意識して撮ったものではなく、原点にある中也、血肉の中に入り込んでいる中也を表現したものとなっているとのことでした。

通常の展示と違って、会場にはタイトルもキャプションもないモノクロの写真作品が並び、来館者のみなさんは、宮嶋氏の世界とその奥にある中也の存在をそれぞれの感性で受けとめていました。



「中原中也を読む会」で自作解説をする宮嶋氏



企画展 ヒックアップ 企画展 II

中原フク。詩人を育てた母親とは、どのような女性だったのでしょうか。

あらためてフクの生涯をみてみると、その平坦ではない一生に驚かされます。横浜で生まれ、7歳で父を亡くし、叔父の養女となり、結婚して6人の男児を産み、夫と4人の子どもに先立たれ、101歳の生涯を終えた女性。

本展では、フクの生涯を辿りながら、中也の作品に見られる母親像や、フクが終生抱き続けた中也への思いを紹介しました。

展示1 生い立ち

フクは、明治12年、横浜で生まれました。父・助之は鉄道局に勤め、通訳などの仕事をしていました。そのため、フクは外国人も住む鉄道官舎に暮らし、海外の生活様式や、当時まだ珍しかった舶来物に親しんで育ちました。

フクが語り聞かせた横浜の思い出話は、中也の心象風景として心に刻まれ、詩のイメージの源泉となったといえます。中也は、「秋の一日」「春と恋人」などの横浜を主題や背景にしたと推定される詩を残しています。

明治19年、父が亡くなり、フクは母とともに父母の実家がある山口・吉敷へ移り住みます。その後、湯田で医院を開業していた叔父・政熊の養女となり、小学校卒業後に湯田の中原家に移りました。

ここでは、当時の横浜・山口の時代背景を紹介しながら、フクの誕生から少女時代を辿りました。

《主な展示資料》

中也詩原稿「春と恋人」、中原フク筆長楽寺宛書簡

展示2 詩人・中也の母として

ここでは、フクが結婚して母となり、中也と死別するまでの時代に焦点を当て、中也を支えたフク存在を照らし出しました。

また、母親が登場する中也作品として「夏の日の歌」「子守唄よ」を取り上げ、中也が詩の中で表現した母親像について紹介しました。

●中也誕生

フクは、軍医の野村謙助と結婚後、7年目にして待望の長男・中也を授かります。

フクと謙助は中也に対して熱心な教育を行い、中也は小学校で優秀な成績を修めました。その一方で、短歌を趣味としていた両親の影響もあり、次第に文才を発揮するようになります。中也とフクが一緒に雑誌に短歌を投稿し、中也の作品だけが掲載されたこともありました。しかし、フクは、勉学に励んでほしいという願いから、中也が文学に熱中することを喜びませんでした。

中也は名門・山口中学校に入学しますが、次第に成績が下がり、3年で落第。退学した中也は京都の立命館中学校に転入し、親元を離れます。心配ばかりかけていた中也について、フ

クは「中也はなにかにつけて、とにかく肝やき息子でした。」と語っています。

●詩人・中也

大正14年、中也は上京し、学校を転々としながら郷里からの仕送りで生活していました。一方で、小林秀雄、河上徹太郎、大岡昇平、安原喜弘らと知り合い、詩人として歩み始めます。フクは、中也の文学活動に理解を示すことはできませんでしたが、中也が東京に暮らすことを許し、息子の生活を支えました。

昭和8年末、中也は遠縁にあたる上野孝子と結婚し、翌年、長男・文也が誕生。同年末には、第一詩集『山羊の歌』が刊行されました。フクはその資金として、当時としては大金の300円を援助しています。



中也の母・フク

平成23年11月9日(水)〜平成24年4月15日(日)

●中也の夭折

昭和11年、最愛の息子・文也が急逝するといふ悲劇が中也を襲います。悲しみのあまり身心を病んだ中也は、フクのはからいにより、精神科病院・中村古峽療養所に入院。フクは山口からたびたび上京し、中也の様子を見守りました。退院後、中也は鎌倉に転居し、療養しながら詩作を続けていましたが、昭和12年秋、30歳で亡くなります。第二詩集『在りし日の歌』原稿を小林秀雄に託し、郷里での再出発を期していた矢先のことでした。フクは中也終焉の地となった鎌倉養生院で、息子を看取りました。

《主な展示資料》

「婦人画報」第168号、中也筆中原フク宛書簡、詩集『山羊の歌』中原フク筆大谷從二宛書簡「紀元」第1巻第2号、「新女苑」第1巻第7号

展示3 中也没後を生き延びて



ここでは、中也没後の時代に焦点を当て、フクが抱き続けた中也への思いを紹介しました。また、初公開となる「私の上に降る雪は」わが子中原中也を語る』に収められたインタビュー音声と、フク晩年の映像を視聴できるコーナーを設けました。

●詩碑建立

昭和40年、井上公園(高田公園)に中也の詩碑が建立されます。中也の友人たちや地元の人々の支援により実現した詩碑建立をフクは心から喜びました。その気持ちを従妹への手紙の中で、次のように認めています。

中也はほんとに幸福者です さぞ地下でよろ

こんで居ります事と存じます きもやきむす子と申す人がありました時に 私も何にも人様には申さずがまんした甲斐ありて 今では湯田の人が皆湯田からあんなあらい人が出でうれしいと申て居ります

●中也を語る『私の上に降る雪は』刊行

没後になって名声の高まる中也について語ることも多かったフク。そこには、生前、詩人としての中也をもっと応援してあげればよかったという思いがありました。

そして、昭和48年、当時94歳のフクの口述書『私の上に降る雪は わが子中原中也を語る』が刊行されます。母だからこそ知り得る中也の人生を愛情豊かに語った稀有な評伝であり、中也を知るための必読の書として、現在も読み継がれています。

●101年の生涯

フクは少女時代に出会った茶道を愛し、生涯を通じて続けていました。夫と4人の息子に先立たれながらも旧家を守りぬいてきたフクにとって、茶道は人生の大きな支えでもありました。

また、中也愛好者や研究者からの訪問を受けることも多く、小林秀雄、大岡昇平、安原喜弘といった中也の友人たちとの親交も続きました。昭和55年、フクは101歳でこの世を去ります。晩年、生涯を振り返り、次のように語っています。

私のように九十数年も生きてきますと、悲しいことにも多く出くわしました。葬式はいくつもお出しました。けど、近ごろではお茶席にすわる

と何事もきれいに忘れてしまおうんです。そのことだけで、私は八十数年、お茶を続けてきたかいたが あったと思っております。そして、私は”無の境地”でそのまま死ねたらと思っております。

(私の上に降る雪は わが子 中原中也を語る)

《主な展示資料》

中原フク筆西川マリエ宛書簡、中原フクインタビュー録音テープ、中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は わが子中原中也を語る』、映像『詩人 中原中也の母 白寿の日々』在りし日の母 中原フク(中原忠郎制作、中原フク色紙)汚れつちまつた悲しみに……」



「文学散歩」
「高原の自然と文学」
バスツアー

1



9月25日、特別企画展「雑誌『四季』と中原中也」関連イベントとして、山口観光コンベンション協会主催、秋吉台エコ・ミュージアムと当館の協力による「文学散歩」高原の自然と文学」バスツアーが開催されました。講師は秋吉台エコ・ミュージアム自然観察指導員の田原義寛氏と、特別企画展を担当した当館の学芸担当職員。まずは記念館で展示の解説を受けた後、長門峡へ向けて出発。移動のバスの中でも、講師2人による山口の自然や文学者についての説明が盛りだくさんです。長門峡では中也の「冬の長門峡」の詩碑を見学し、付近の植物を観察しながら散策。その後、道の駅・願成就温泉にて昼食を取り、船方農場へ向かいました。ここでは田原氏の解説のもと、実際に高原にいる虫の声に耳を傾けます。秋の大自然を満喫した後は、農場内

にある葡萄棚の下でブレイクタイム。コーヒーを味わいながら、参加者に実際に詩を作っていたいただきました。あらかじめツアーの最初にメモ用紙をお渡しし、感じたことを書き留めてもらっていましたが、その断片をグループ内でつなぎあわせて、1篇の詩を作り上げるというやり方です。思わぬ言葉の組み合わせが飛び出し、大変盛り上がりました。参加者の方からは「自然と文学の両方を学ぶことができ楽しかった」「また参加したい」といった声が寄せられました。

浅田弘幸氏特別展示

2



6月1日〜8月28日の間、当館の中也記念室（読書休憩コーナー）において、浅田弘幸氏の画集『Water』と直筆イラスト色紙を展示しました。

浅田氏は、『「ミ」（アイル）』『テガミバチ』などの作品で知られる漫画家です。浅田氏と中也作品との関わりは深く、「眼鬼」（平成4年）では、全篇にわたり中也の詩が重要なモチーフとなっています。この作品で中也の詩に興味を持ったという方も少なくありません。また、集英社文庫の中也詩集『汚れつちまつた悲しみに……』のカバーイラストも浅田氏の作品です。

『Water』は、浅田氏の画業25周年を記念して出版されたイラスト集で、その中に、当館館報第15号にお寄せ下さったイラストと文章が収録されています。この度は、画集出版を記念しての展示となりましたが、本展のために浅田氏がイラスト色紙を描いて下さいました。

展示アンケートには、この展示のために遠方からご来館下さったという方からの感想も寄せられ、浅田氏の作品を愛する人々の存在と中也作品との結びつきにあらためて気付かされました。

詩の朗読会
「心も声も響かせよう」

3

11月13日、山口市米屋町商店街みずほ銀行前広場で、山口市との共催により、山口市中心市街地まちと文化推進事業の一環として、「詩の朗読会」心も声も響かせよう」を開催しました。

出演は、山口市立湯田小学校・山口市立白

石小学校の児童、山口大学教育学部附属山口中学校の生徒、NHK文化センター山口教室「楽しい朗読」受講生、演劇集団「交差転プロジェクト」の皆様でした。また、司会の落合さとこ氏と当館の福田百合子名誉館長・中原豊館長も朗読に参加しました。

中也の詩だけではなく、和合亮一・金子みすゞや自作の詩などを朗読される方もありました。また、動きを付けたり、楽器の演奏や歌を交える方もあり、思い思いに詩を表現されていました。最後に、出演者と会場の方々と、中原館長のギター演奏にあわせて中也の「村の時計」（梅津和時作曲）を歌い、約1時間半の朗読会は終了しました。商店街に小学生から大人までの声が響き渡り、多くの方が足を止めて熱心に聞いていました。

残念ながら、この事業で開催する朗読会は今回で終了となりますが、平成24年度以降も別の形で詩の朗読会を続ける予定です。今後、是非多くの方にご参加・ご観覧いただきたいと思っております。



4月20日	企画展Ⅰ「宮嶋康彦—中原中也に訣別 白と黒の振幅の果てに」 (～8月28日)	10月1日	おいでませ! 山口国体・山口大会 記念館開館時間延長(～10日、21～22日) 主催:山口国体観光おもてなし実行委員会
22日	第83回 中也を読む会 企画展Ⅰ「宮嶋康彦—中原中也に訣別 白と黒の振幅の果てに」見学	15日	プロムナード・トーク② 特別企画展解説
29日	生誕祭「空の下の朗読会」(於 記念館前庭) 自由参加の朗読(朗読参加者25名) 高橋竹山コンサート	22日	中也命日、お墓参り
	第16回 中原中也賞贈呈式(於 ホテル松政) 受賞詩集: 辺見庸「生首」(毎日新聞社) 記念講演「共感と驚異—なぜ詩歌は読まれないのか」 講師: 穂村弘 主催: 山口市	24日	高円宮妃殿下ご視察
	特別展示: 中也訳「ランボオ詩集」(～5月15日) 中也自筆献呈署名本(阿部六郎宛)	28日	第89回 中也を読む会 「四季」同人—立原道造、三好達治の詩を読む
	特別展示: 辺見庸「生首」及び著書(～5月29日)	30日	公開講演Ⅱ(於 ホテルニュータナカ) 「四季」と中原中也」講師: 中村稔
30日	第1回 運営協議会	11月3日	プロムナード・トーク③ 特別企画展解説
5月17日	特別展示: 震災復興応援企画 東北を中心とした文学館の紹介、草野心平・尾形亀之助の詩を展示	9日	企画展Ⅱ「中也の母・フク」(～H24年4月15日)
27日	第84回 中也を読む会 屋外展示「樹木の詩」を読む1—「残暑」「一夜分の歴史」	13日	詩の朗読会—心も声も響かせよう(於 山口市米屋町商店街) 共催: 山口市
6月1日	特別展示: 浅田弘幸イラスト集「Water」、直筆サイン色紙(～8月28日)	25日	第90回 中也を読む会 企画展Ⅱ「中也の母・フク」見学
24日	第85回 中也を読む会 第16回中原中也賞—辺見庸「生首」の詩を読む	29日	第2回 運営協議会
7月22日	第86回 中也を読む会 福田名誉館長と中也詩を読む	12月23日	第91回 中也を読む会 宮沢賢治の詩を読む
8月26日	第87回 中也を読む会 朗読を楽しむ	1月27日	第92回 中也を読む会 音楽になった中也の詩を読む—音楽を聴きながら
31日	機関誌「中原中也研究」第16号発行	2月11日	第17回中原中也賞選考会(於 西村屋) 受賞詩集: 暁方ミセイ「ウイルスちゃん」(思潮社) 主催: 山口市
9月1日	特別企画展「雑誌『四季』と中原中也」(～11月6日) オープニングセレモニー開催	15日	第9回常設テーマ展示「在りし日の歌」まで(～H25年2月18日)
3日	プロムナード・トーク① 特別企画展解説	18日	開館18周年記念日
17日	公開講演Ⅰ(於 ホテルニュータナカ) 「中也を追った青春」講師: 唐十郎 共催: 中原中也の会	24日	第93回 中也を読む会 常設テーマ展示「在りし日の歌」まで見学
23日	第88回 中也を読む会 特別企画展「雑誌『四季』と中原中也」見学	3月3日	愛、あったまる 山口お宝展(～4月8日) 「ノート1924」の特別展示 主催: 山口商工会議所
25日	文学散歩～高原の自然と文学 特別企画展「雑誌『四季』と中原中也」で行くバスツアー 主催: (財)山口観光コンベンション協会 協力: 秋吉台エコ・ミュージアム	20日	企画展「中也の母・フク」開催記念 「フクさんを偲ぶお茶会」(於 記念館前庭) 共催: 表流山口露山会
		23日	第94回 中也を読む会 屋外展示「樹木の詩」を読む2 —「ためいき」「つみびとの歌」「いちぢくの葉」(いちぢくの、木末みあげて、)
		31日	館報第17号発行



中村稔氏公開講演



震災復興応援企画



フクさんを偲ぶお茶会

中原中也の会

5月21日	室生犀星学会2011年度春季大会・中原中也の会第15回研究集会 (於 KKRホテル金沢) 総合司会: 彦坂美喜子 講演「異土の乞食となるとも—室生犀星〈金沢〉 中原中也のコレスボンデンス」 講師: 北川透 シンポジウム「室生犀星と中原中也—抒情詩の可能性」 パネリスト: 安元隆子、倉橋健一 司会: 傳馬義澄 共催: 室生犀星学会 協力: 石川詩人会	9月17日	中原中也の会第16回大会「中原中也と演劇性」(於 ホテルニュータナカ) 総合司会: 加藤邦彦 詩の朗読とトークセッション「いま詩の力を、中原中也の彼方へ」 出演: アーサー・ピナード、三角みづ紀、文月悠光 司会: 佐々木幹郎 特別公演: 高橋竹山 講演「中原中也を追った青春」講師: 唐十郎
7月31日	会報第30号発行	18日	中原中也の会第12回セミナー(於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館) 講演「雑誌『四季』と中原中也」講師: 池田誠 特別企画展「雑誌『四季』と中原中也」見学 解説: 池田誠
		12月25日	会報第31号発行

◎第17回中原中也賞

『ウイルスちゃん』



あけがた
暁方ミセイ氏

Chuya Nakahara prize

17th

第 17回の中原中也賞は、公募および推薦による171詩集の中から、暁方ミセイ氏の『ウイルスちゃん』（思潮社）が選ばれました。

暁方氏は昭和63年生まれの23歳（受賞時）。最終選考に残った7詩集の作者の中で最年少でした。神奈川県横浜市出身で、幼い頃から詩を書きはじめ、中学生の時にインターネットに詩を投稿、大学2年生の時に「現代詩手帖」へ投稿をはじめ、平成22年には第48回現代詩手帖賞を受賞しています。

『ウイルスちゃん』は暁方氏の第一詩集で、序詩「呼応が丘」と「世界葬」以下の19篇を収めています。いずれも大学在学中に書かれた作品で、4つの章のタイトルにはタイ語が配られています。

選考会では、その新鮮な感覚、宇宙に広がっていく想像力のスイングの大きさ、語法の正確さなどが高く評価され、全会一致での受賞決定となりました。

ほのかな熱が頬のうえに降る
樹林や薄氷や、凍えた反射光と
同じ属性にある
わたしはからだ
絶え間もなく、
あたたかいからだ

雪が降ってくる
あかるい、

真つ青な空から（あるものは円を描き
（あるものはまた空へ舞い上がり
雪が

降ってくる

（光りながら 脈打ちながら

すべての輝かしい現実が
わたしへとまるまってゆく

（「世界葬」より）



この人の詩は、見えない隠面として、いつも死に滲透され、やわらかい無常観を感じながら、しかし、ことは明るい光に満ち、春が希求されている。3・11以後の世界でも、リアリティを主張できる詩集が、ここにあったことを喜びたい。（「選評」より）

◎平成24年度 記念館関連行事予定

2012年4月—2013年3月

4月18日	企画展Ⅰ 「高橋新吉—ダダイズムと関東大震災」 （～8月26日）	5月19日	中原中也の会第16回研究集会 （於 神奈川近代文学館）	10月22日	中也命日・お墓参り
4月29日	生誕祭 空の下の朗読会 （於 中原中也記念館前庭） 〈無料開館日〉	8月30日	特別企画展 「中原中也の手紙—安原喜弘との交友」 （～10月29日）	11月1日	企画展Ⅱ 「中也の父・謙助」 （～平成25年3月24日）
5月5日	こどもの日〈無料開館日〉	9月15日	中原中也の会第17回大会 （於 ホテルニュータナカ）	平成25（2013）年 2月21日	第10回常設テーマ展示 「中也の歌謡性」〈仮〉
		9月16日	中原中也の会第13回セミナー （於 ホテルニュータナカ・中原中也記念館）		※日程等、変更の場合もございます。

中原中也記念館 館報【第17号】平成24年3月31日

発行◎ 中原中也記念館 〒753-0056 山口県山口市湯田温泉1丁目11-21 TEL083-932-6430 FAX083-932-6431 E-mail:chuyakan@c-able.ne.jp http://www.chuyakan.jp/

環境に配慮し、用紙には再生紙を使用しています。印刷インキは植物性大豆油インキを使用しています。